

健康 ぷらざ

パーキンソン病

一薬と運動は車の両輪

指導：公立学校共済組合関東中央病院 神経内科統括部長 織茂 智之

企画：
日本医師会

No. 526

パーキンソン病の運動症状

パーキンソン病では、「手足がふるえる」、「筋肉がこわばり硬くなる」、「動作が遅く動きが少なくなる」、「姿勢のバランスがうまく保てない」、という症状が起こります。これらを4大運動症状(図)といいます。



図 パーキンソン病の4大運動症状

ほかの症状にも注意

パーキンソン病ではそのほかに、便秘、立ちくらみや失神、頻尿などの自律神経症状、嗅覚の低下、うつや幻覚などの精神症状、認知症、不眠や、眠っているのにはっきりしゃべったり暴れたりするなどの睡眠障害に伴う症状などが起こります。これらの症状は運動症状より先に現れることがあり、パーキンソン病の早期診断につながる重要な手がかりになると考えられています。

パーキンソン病の診断

運動症状のうち、動作が遅く動きが少なくなる症状があり、椅子に座ってくつろいでいる時に手足がふるえる症状と、筋肉がこわばり硬くなる症状のどちらかあるいは両方があれば、パーキンソン病の症状があると考えられます。その上で、病歴や服薬歴、脳のMRI画像などを参考に検討し、最終的には運動症状を改善させる薬を服薬してみて十分な効果が得られれば、パーキンソン病であると診断します。

パーキンソン病の治療と経過

パーキンソン病は、脳内で作られるドパミンという物質が不足して起こる病気です。現時点では根本的な治療法はありません。しかし、脳内のドパミンを増やす薬を服用して運動症状を改善させ、運動療法を併用すれば、健康的な状態を長く保ち、天寿をほぼ全うできます。

日本医師会ホームページでは、健康ぷらざのバックナンバーがご覧いただけます。



日医
バーコード読み取り機能付き
携帯電話もしくはスマートフォン
でご利用になれます。